

論文

乱世を彩る独断

『太平記』の天皇たち

和田 琢磨

一、「明君」不在の物語

『太平記』は、為政者・権力者を厳しく批判する南北朝時代の現代文学である。天皇・公家、足利將軍・有力守護大名、さらには南都北嶺・禪宗の僧と、あらゆる立場の人々を分け隔てなく批判する、四十巻にもおよぶ大作だ。その批判の基準は冒頭部に置かれた「序」に、次のように示されている。

蒙竊かに古今の変化を探つて、安危の所由を察るに、覆つて外なきは天の徳なり。明君これに体して国家を保つ。載せて棄つることなきは地の道なり。良臣これに則つて社稷しやしよくを守る。若しその徳欠くる則は、位ありと雖も持たず。所謂夏の桀は南巢に走り、殷の紂は牧野に敗る。その道違ふ則は、威ありと雖も保たず。曾て聴く、趙高は咸陽に死し、祿山は鳳

翔に亡ぶと。ここを以て、前聖慎んで法を将来に垂ることを得たり。後昆顧みて誠めを既往に取らざらんや。

ここには、「天の徳」を体現した「明君」と、それを支える「良臣」という二つの存在が国を守るという儒教思想が示されている。この理念は『太平記』の最後の部分と対応していて、表面的には作品の枠組みを規定しているといつてよい。すなわち、巻四十一「細川右馬頭西国より上洛の事」は、細川頼之が管領職に就いたことで北朝の後光厳天皇―將軍足利義満―管領細川頼之という新たな君臣関係が成立したことを示し、「中夏無為の代になりて、目出度かりし事どもなり」と結んでいるのである。

ただし、頼之は理念どおりの人物とされているわけではない。それは「諸事の沙汰の途轍とてつ、少し先代の貞永、貞応の旧規に相似たりと云ふ」からも理解されよう。「貞永・貞応」とは北条義時・泰時の時代を指し、巻三十五「北野参詣人政道雑談の事」におい

て、泰時は理想的な為政者の一人に数えられてる。頼之の政治手腕はこの泰時らの政治手法に近いとされているが、所詮「少し」なのである。この部分、諸本間に異同が認められるものの、¹を欠く伝本は、管見に入った限りでは玄玖本と神宮徴古館本の二本のみである。誤脱であろう。したがって、理想的執権とされていた義時・泰時に、少し似る²というのが『太平記』の本来の姿だと考えられるのだ。『太平記』における頼之は、「序」が説くような「良臣」とまではいえないのである。

この「序」に続く後醍醐天皇登場所場において、「明君」不在ゆえに長きにわたる乱世が続いたという認識が明示されている。

ここに、本朝人皇の始め神武天皇より九十六代の帝、後醍醐天皇の御宇に、武臣相模守平高時と云ふ者ありて、上には君の徳に違ひ、下には臣の礼を失ふ。

(巻一「後醍醐天皇武臣を亡ぼすべき御企ての事」)
ここには、「序」の理念に反した後醍醐天皇と北条高時の存在が示されている。『太平記』は、この二人のために世が乱れ始め、以降「今に至るまで三十余年」もの間乱世が続いたと語っているのだ。北条高時を中心とした鎌倉幕府が滅亡するまでを語る巻十一までは高時批判を中心に据え、表だって後醍醐を批判することはほとんどない。だが、後醍醐は最初から暗君として位置付けられているのである。

では、「明君」とはどのような存在なのか。政道批判を展開し、「序」や巻三十五「北野参詣人政道雑談の事」(「北野通夜物語」と並び『太平記』の思想をよく表しているとされている巻二十七「雲

景未来記の事」(「雲景未来記」)⁴に、その答えを探ってみよう。ここは、雲景の問いに答える中で、天狗が政道論を語っている場面である。

この人々世を取りし始めは、一日も四海を持ちたならば、政道はよく行はんずるものと思ひしかども、上暗く、下^へ諂ひて、諸に親疎あり。されば、神明三宝の冥鑑に背き、人望を失ひしによつて、わが非をば知らず、誹り合ふ心あり。ただ獅子の虫の獅子を喰らふが如し。たまたま仁政と思ふも、仁政にあらず。ただ人の歎きのみなり。それ仁とは、恵みを四海に施し、深く民を憐れむを仁と云ふ。政とは、道なり。万づ国を理め、人を撰んで浅深を知る。しかれども、善悪親疎を分かず撫育するを、政と申すなり。

天狗は、「恵みを四海に施し、深く民を憐れ」み「善悪親疎を分かず撫育する」仁政を求めている。同じことは「北野通夜物語」にも語られているから、『太平記』では仁政が理想的な政治とされていることが理解されよう。右に続き、天狗はさらに続けている。しかるに、政徳聊かもかくの如くならず。内心は欲深く、放逸にして、君臣父子の儀をだにも分かず。況んや、その外の徳政^{れんじゆつ}憐恤の儀に於てをや。

仁政を行う為政者こそが理想的なのだが、この世にはそのような為政者は存在しない。それは、後醍醐天皇も例外ではないという。すなわち、

先朝、随分賢王の行ひを学びしかども、真実の仁徳、撫育の叡慮は惣じてなし。絶えたるを継ぎ、廃れたるを興し、神明

仏陀を御帰依あるやうに見えしかども、矯飾きようしよくのみあつて、
実儀まします。

と評しているのである。さらには、他の人に比べ賢王であつたから一時的に世を治めることがあつたものの、所詮は相対的に評価されただけの存在であつたがために、結局「高時に劣る足利に世をば奪」われてしまったというのだ。では、もう一方の皇統である持明院統の光厳天皇はなぜ世を治められているのかというと、「権を執り運を開く武家に順はせ給ひて、ひとへに幼児の乳母を憑たのむが如く、奴やつこと等しい」存在で、「理ことわりをも欲心をも打ち捨て」たからであるという。持明院統の天皇も理想的な人物であつたわけではない。他に比べて悪くはないといった程度の存在に過ぎないという認識が示されているのだ。後醍醐に対する批評や先の細川頼之の位置付けと同様、『太平記』が為政者を如何に見ていたかが理解されよう。

ここで改めて「序」を見ると、「明君」とは「天の徳」を模範とした人物とされている。つまり、恵みや慈愛を与える存在である天を模範にして国を治める人物ということになる。ということは、私欲を捨て、人々を慈しみ大切に育てる「仁政」は、まさにこの「明君」が行うべき政治といえよう。国が平和になるには、「良臣」に支えられながら、「明君」が「仁政」を行わねばならないというのが「序」の説くところなのである。

だが、『太平記』には「明君」は存在しない。故事・説話には登場するものの、それは実在する君主を批判するための例に過ぎない。一方で、楠正成や万里小路藤房など「良臣」は僅かに存在す

る。しかし、彼らが活躍することはほとんどない。主君に否定され、その結果、「君」を批判する存在となつているのである。

では、『太平記』の天皇たち——後醍醐・後村上・光厳・光明・崇光・後光厳——は、なぜ「明君」たり得ていないのか。そして、彼らの行動は如何なる結果を招いているのか。天皇たちの行動と世の動向との関係が直接的に結びついている、天皇が自らの意思を押し通して決断を下す場面、すなわち独断を下す場面を中心に、右の疑問について考えていきたい。

二、『易経』の文言が見えない後醍醐天皇

『太平記』に登場する重要人物の一人に後醍醐天皇がいる。長坂成行氏は、巻一「関東調伏の法行はるる事」、巻二「南都北嶺行幸の事」、巻三「先皇六波羅還幸の事」、巻四「先帝還幸の事、并俊明極参内の事」、巻七「船上臨幸の事」、巻十一「千種頭中将殿早馬を船上に進せらるる事」、巻十七「堀口還幸を押し留むる事」の叙述から、後醍醐の「意志的・積極的な態度」「あくことのない執着心」「我意に任せての狭量さ・傲慢さ」を指摘し、大塔宮護良親王・万里小路藤房・楠正成・新田義貞らの臣下を都合よく使い、自分勝手に切り捨てる人物像を浮かび上がらせた。その上で、怨霊となつた後も後醍醐が作品世界に影響を及ぼしていることを指摘し、『太平記』における後醍醐像の重要性について初めて言及したのである。

また、中西達治氏は、後醍醐と光厳の行動は「ポジとネガの関

係で完全にパラレルに呼応する」と考え、「自らの思想をこの世に実現するために、後醍醐天皇は、あくまで主体的、意志的に行動し続ける」一方で「光厳天皇のほうはあくまで受動的」であることを指摘した。

これ以降、後醍醐に関する論考はいくつも発表されていて、たとえば、北村昌幸氏は、『北野天神縁起』の醍醐天皇像と重ね合わせられることで、怨霊後醍醐が「六道世界の枠に縛られながら神仙に膝を屈する存在」「絶対的な力を有してはいない存在」となっていることを指摘し、怨霊後醍醐に限界があったからこそ太平が導かれたという『太平記』の構想を考えている。

それでは、このような『太平記』における後醍醐天皇は、どのように現実と向き合い、為政者として振る舞っているのだろうか。巻十一「千種頭中将殿早馬を船上に進せらるる事」を中心に見てみたい。ここは、「周囲の反対を押し切って帰京を決意する後醍醐の強い意志を描く」ために、わざわざ諸卿僉議を創作し挿入したと北村昌幸氏が指摘している場面である。すなわち、足利尊氏や赤松円心から、伯耆船上山の後醍醐のもとに六波羅探題を亡ぼしたという報告があったが、鎌倉がどうなったかはまだ分からない状況であった時に、後醍醐は帰洛すべきかどうか迷い、次のように公家達に対策を話し合わせたというのである。

これについて諸卿僉議あつて、則ち還幸なるべきや否やの意見を献ぜらるる時、勘解由次官光守、諫言を以て申されけるは、「両六波羅すでに没落と云へども、千劍破発向の朝敵等、なほ畿内に満ちて、勢ひ京洛を吞めり。(中略)今、一戦の

雌雄を計るに、御方は、わづかに十にしてその二、三を得たり。『君子は刑人に近づかず』と申す事の候へば、暫くただ皇居を移され候はで、諸国へ綸旨を成し下され、東国の変違を御覽ぜらるべくや候ふらん」と申したりければ、当座の諸卿、悉くこの儀に同ぜられける。

すると、右の如く諸卿は皆、しばらく様子を見るべきだということ考えに至った。だが、後醍醐はそれに納得できなかった。そこで後醍醐は自ら易経を開き、都に戻るか否かを占ったのである。その占いの結果を見てみたい。

御占、師卦（師のけ）に出でて云はく、「師は貞なり。丈夫は吉なり。咎無し」と。象に曰はく、「上六は、大君命を有つて国を開き、家を承がしむ。小人をば用ゐること勿かれ」と。王弼が注に云はく、「師の極に処つて師の終りなり。大君の命を有つとは、功を失はざるなり。国を開き、家を承ぐとは、以て邦を寧んずるなり。小人をば用ゐること勿かれと云ふは、その道に非ざればなり」と注せり。

ゴシック部分の解釈は、「上六は師卦の終りであるから、論功行賞の道を言う。戦いに勝てば大君たる者、命を下して、それぞれの分に応じ、ある者には諸侯として国を開かせ、ある者には卿大夫として家を受けさせるべきであるが、たとえ功績があつても小人は任用してはならない」(高田真治・後藤基巳氏訳『易経(上)』岩波文庫、一三五～一三八頁)となる。この部分、諸本間に本文異同が認められ、たとえば、▼▲で挟んだ部分が「象曰、大君有命以正（レ）功也、小人勿（レ）用（レ）乱（レ）邦也」(神宮徴古

館本)となっている伝本も多いものの、倒幕後の公正な論功行賞の必要性を説いていることに違いはない。

だが、後醍醐はこの部分を理解していなかった。だからこそ、建武の新政を開始した直後から公平性を欠いた論功行賞を行ったのである。それは、後醍醐の随一の賢臣(卷十三)「北山殿御隠謀の事」万里小路藤房さえ、「今の政道、ただ抽賞の功に当たらざるのみにあらず、かねては綸言の^{たふし}掌^{ひらめ}を翻す憚りあり」と批判するほどであった。藤房はこれに続き、足利尊氏の登場と建武政権の崩壊を予言し(卷十三)「藤房卿遁世の事」、実際にそのとおりとなっているのである。卷十二「公家一統政道の事」に「内奏の秘計」により公正な論功行賞が行われず、藤房ら数人の奉行が辞任せざるを得なかった様子が語られていることから、この問題により後醍醐政権が混乱を来したことが知られる。『易経』が試めていた不正な論功行賞が、建武政権崩壊の大きな要因だったと『太平記』は語っているのだ。

こういった事態が生じてしまったのは、「師は兵衆・軍隊の意。(中略)これを統率する人が老成した丈夫(長老)であれば、吉であって咎はない」(岩波文庫『易経(上)』)と訳される冒頭部の、特に「咎はない」の部分だけを後醍醐が受け入れたからに他なるまい。「この上は、何をか御疑ひあるべき」と、諸卿の諫言を退け、自ら帰洛を即決した場面からは、一日も早い復権を望む後醍醐の姿しか読み取れない。この後醍醐の強い思いが、『易経』を読み誤らせることにつながったのではないか。後醍醐の目には都合のよい文言しか入ってこなかった。それゆえに『易経』を正確に読むこと

ができなかったと考えるのである。後醍醐の目には、「王弼」以下の文章も確かに映っていた。だが、見えてはいなかったのだ。

ところで、この『易経』を後醍醐が正確に読んでいないということは、すでに濱崎志津子¹²氏も指摘している。ただ、濱崎氏は、後述する卷三の楠正成登場場面では後醍醐は的確に夢の内容を解けていたのに対し、卷十一では正確に予見できていないことを問題視し、「未来を悟り、働きかけていくことのできた超人・後醍醐から、その権力を剥奪する手始め」と、後醍醐像の変質の転換点と考えている。だが筆者は、後醍醐の普遍的な性格の一面がこの部分にも認められると考えており、濱崎氏とは見解を異にする。以下に、筆者の考えを具体的に述べていくことにしよう。

自分の意に適った部分だけを取り入れ決断する後醍醐の性向は、たとえば、宋朝の俊明極の「この君、亢龍の悔いありと云へども、二度帝位を踐ませ給ふべき御相あり」という予言を信じ、帝位にこだわったとする場面(卷四)「先帝遷幸の事、并俊明極参内の事」にも認められる。俊明極の予言は「叡慮に憑み思し召す御事」であった。幕府に捕らえられ、退位を要求されるといふ絶体絶命の状況下にあっても強硬に意志を貫いたのは、この予言が心の支えとなっていたからだといえるのである。だが、「勢位を極めておごり^{たか}亢ぶればかえって悔をのこすことにもなる」(岩波文庫『易経(上)』八一頁)という意の「亢龍の悔い」の部分には、後醍醐はまったく関心を寄せていない。ここでも、自身に向けられた不都合な批判には目を向けず、復権に関する点にしか注目していないのである。また、建武政権誕生時に「龍馬」が献上されたことを万里小路

藤房のみ「不吉の表事」「ただ奇物の翫びを止めて、仁政の化を致すべきと理を尽くして説いたところ、「龍顔少し逆鱗の御氣」を示した場面(巻十三「藤房卿通世の事」)にも同様の志向性を指摘することが出来る。ここで発せられた、「天馬の遠きより来たれる事、吉凶の間、諸臣の勘ふる例、すでに先に畢んぬ。藤房いかと思へる」という後醍醐の問いかけは、すでに諸卿から吉事であるという答えを得た上でのものである。それにもかかわらず、またあえて同じ質問をしているのは、諸卿同様藤房も後醍醐の善政ゆえに現れた「吉事」であると答えるはずだという期待があったからに違いない。後醍醐は、遅れて参上した賢臣藤房からも「吉事」という答えを引き出し、満足したかったのだ。だが、藤房は天馬を「奇物」(これは、巻二「後醍醐天皇武臣を亡ぼすべき御企ての事」、巻五「犬の事」に認められる語で、いずれも北条高時の悪政を批判している)と認識し、「仁政」を行うことを要求した。期待どおりの答えが返ってこなかった挙げ句に、批判(藤房の諫言)されたために後醍醐は怒りの表情を見せたのだらう。

このような後醍醐像を踏まえると、『易経』の文面を正確に読み解けなかったのも、やはり、後醍醐の性格に因むと考えられるのではないか。後醍醐は、「もし命を背き、義を軽んぜば、君も継体の君にあらず、臣も忠烈の臣にあらず」(巻二十一「先帝崩御の事」と、死してなお天皇すらも自身の思いどおりにしようと考えていたほど、自身を絶対的な存在と考えていた人物である。他に例を見ない、驚くほどに自己中心的で絶大な自信を持っていた人物だったのだ。そのような人物だったからこそ、自分の予想・期待に

反する状況を無意識のうちに黙殺してしまうことがあったのではないだろうか。批判・諫言や想定外の事態を認められず、客観的に物事を判断できない一面が後醍醐にはあり、それが建武政権を崩壊させ建武の乱を惹起してしまったと、『太平記』は語っているのである。

このように後醍醐像を見ていったときに、濱崎氏が取り上げていた楠正成の登場場面についても考えてみる必要があるようだ。

三、後醍醐天皇は夢を正確に解けたのか

『太平記』において、楠正成は数少ない理想的人物とされている。¹⁴「智仁勇の三徳を兼ねて、死を善道に守り、功を天朝に播^{はく}する事は、古へより今に至るまで、正成程の者は未だあらず」という語り手の絶賛は、正成の位置付けを端的に示している。人々は、正成の死を「王威武徳を傾くべき端」(神宮徴古館本等多くの諸本は「聖主再び国をうしなひ、逆臣横^{シヤ}に威を振ふべき其の前表」とする)と認識した(巻十六「正成討死の事」)。事実、この直後に後醍醐は都落ちし、ついには吉野の山中で非業の死を遂げることになるのである。

『太平記』の正成は特別な人物として登場している。「敏達天皇四代の孫、井出右大臣橘諸兄卿の後胤」で、母が「信貴の毘沙門に参つて、夢想を感じて儲けたる子」だったので「幼名を多聞」と名乗ったと、笠置寺の成就房律師の口をとおして最初に紹介されているのである(巻三「笠置臨幸の事」)。つまり、天皇の血を引

き毘沙門天から授かった申し子という、貴種性と聖性とを併せ持った人物として物語に登場しているのである。

後醍醐は、笠置山で窮地に追い込まれているときに、夢想を通じてこの正成を見いだした。その夢の内容を見てみよう(巻三「笠置臨幸の事」)。

所は紫宸殿の庭前と覺えたる地に、大きな常盤木あり。緑の陰茂りて、南へ指したる枝、殊に榮えはびこり、その下に、三公、百官位によつて列座す。南へ向かひたる上座に、御座の畳を高く布いて、未だ座したる人はなし。主上、御夢心地に、誰を設けんための座席やらんと、怪しみ思ひ召して立たせ給ひたる処に、髻結ひたる童子二人、忽然として来たつて、主上の御前に跪いて、涙を袖にかけ、「一天下の間に、暫くも御身を隠さるべき所なし。但し、かの木の陰に、南へ向かへる座席あり。これ、御ために設けたる玉屐にて候へば、暫くここにおはしませ候へ」と申して、童子は遙かに天に登り去りぬと御覧じて、御夢はやがて覺めにけり。

後醍醐は「これは天の朕に告ぐる所の驗」と認識し、漢字を当ててこのお告げについて考えた。その結果、ゴシック部分から「木に南と書きたるは、楠と云ふ字なり」と考え、傍線部から、「朕二度南面の徳を治めて、天下の士を朝せしめんずる」、すなわち再び天下を治めることを童子が示してくれたと理解した。「自ら御夢を合はせられ」た後醍醐は、素直に「憑もしく」思い喜ぶばかりであった。この夢占いの結果、楠正成が紹介され、後醍醐のもとに参上するという展開になるのである。

ここで注目したいのは傍線部をめぐる後醍醐の解釈である。後醍醐は「その陰に南に向かつて座せよと、二人の童子教へつるは」と認識しながら、「その陰」の部分についてはまったく考慮していないのだ。さらにいえば、童子が「暫くここにおはしませ候へ」と述べている点にも注意を払っていない。諸本に共通して「暫く」と制限が設けられているにもかかわらず、後醍醐はこの点も完全に見落としてしまっているのである。従来注目されてきていない部分であるが、ここにも『易経』解釈の場面と同様の後醍醐の性質が認められると考える。以下に論じていこう。

正成は後醍醐と対面し、「正成未だ生きてありと聞こし召し候はば、聖運はつひに開かるべしと思し召し候へ」という言葉を残し、赤坂城で幕府軍と戦う。これ以降、千早城での合戦など正成の超人的な活躍は周知のとおりである。だがその正成は、後醍醐に切り捨てられる形で死地へと向かう(巻十六「正成兵庫に下向し子息に遺訓の事」)。正成の進言を突っぱねて自身の面子を重視する後醍醐の決断が、正成を死に追いやったのだ。「討死せよとの勅定ござんなれ」という諸本に共通した正成の思いから、『太平記』は後醍醐の決断であったと語っていることが分かるのである。¹⁶これに続く、子息正行に対する遺言中の「正成すでに討死すと聞きなば、天下は必ず將軍の代となるべしと心得べし」は、登場時の後醍醐に対する発言と見事に対応しており、以降、正成の予言どおりに物語は展開していく。

このように『太平記』の叙述を整理してみると、夢の中で、玉座とともに「三公、百官」が楠の枝の下に並んでいた意味も、童

子が「かの木の陰に」と言っていた意味も理解されるのではない。未来を知る童子は、正成だけが後醍醐の運命を担う存在であるということ伝えていたのである。その文脈で語られていた「暫く」には僅かに正成在世中という限定の意味が込められていたのであり、その意を解せなかったからこそ、後醍醐は正成を切り捨ててしまい、自身の世をも失ってしまったのである。童子が伝えた重要なメッセージを正確に理解できなかったのは、やはり復権に対する並々ならぬ思いが深く関わっていたよう。先の場合と同じく、私欲が客観的に物事を判断する力を奪ったと考えるのである。

『太平記』において、このように夢や易経等の予言を読み違えている天皇は他にはいない。よって、この点は後醍醐天皇像の特徴と考えてよからう。前述のように、『太平記』は、倒幕活動を語っている間は後醍醐をほとんど批判していないが、建武の新政以後は直接的に批判するようになる。このような姿勢で鎌倉時代末から南北朝時代にかけての動乱を語っていく中で、倒幕活動中に認められる上述の後醍醐像の個性は、乱世を導く要素として確かに機能しているのである。個人的感情を差し挟んでしまった後醍醐の独断が、乱世を継続させた一因であったと語られているのだ。

では、他の天皇は自身の思いを反映させた判断を下すことはなかったのだろうか。節を改め、『太平記』に登場する他のすべての天皇像について考えてみよう。

四、天皇の意思と介入

——後村上・光厳・光明・崇光・後光厳——

最初に、後醍醐を継いだ後村上天皇像について考えてみたい。すでに北村昌幸¹⁷氏が指摘しているように、後村上天皇も後醍醐と同様に自らの意思に基づいた判断を下す天皇であった。たとえば、足利将軍方から離反した山名時氏が南朝に荷担する旨を申し入れてきた際、後村上は「山陰道より攻め上らば、南方よりも、官軍を出だされて、同時に京都を攻めらるべし」と、自ら作戦を口にしつつ山名の申し入れを独断で受け入れている(卷三十二「山名右衛門佐敵と為る事」)。また、卷三十六「仁木京兆南方に参る事」でも「義長御方に参りなば、伊賀、伊勢の両国、官軍に属すべきのみならず、伊勢の国司、顕能朝臣の城も心安くなりぬべし」と、多くの諸卿の反対を押し切って、戦局を見据えた独自の判断を下している。結局、南朝が京都を回復できなかったことを考えれば、足利方からの降人を受け入れた後村上の判断は適切であったとはいえない¹⁸。やはり、後村上の意思も世を乱す一因となっていたのである。

右の二例からも感得されるように、後村上は戦に口を出したがる人物とされている。それは、卷二十三「脇屋刑部卿吉野に参らるる事」にも指摘できる。そこでは、南朝の大将脇屋義助が戦に敗れ、吉野の後村上のもとに参内した際の模様が語られている。義助が後村上に対面した場面を見てみよう。

参内して、龍顔に謁し奉れば、君、玉顔殊に麗しくして、この五、六年が間、北征の忠功、他に異なる由を感じ仰せられて、更に敗北の無念なる事をば仰せ出だされず。

後村上は脇屋義助の敗北をまったく責めることをせず、忠功を讃えるばかりであった。その上、義助の一族のみならず彼に従う兵にまで恩賞を与えたという。敗將に対する後村上の異常ともいえる厚遇に対して洞院実世が批判を加えたのも当然のように思われる。

だが、実世は真実を知らずに批判していたのである。その真実は卷二十二に語られていたはずであるが、よく知られているように、古態本の『太平記』は卷二十二を欠いていて、鈴木登美恵氏は、南朝の興国元年(暦応三年・一三四〇)七月から興国二年(暦応四年・一三四二)十月頃までの約一年間の越前と美濃における義助の合戦の様子が語られていたと推定している。しかし、幸運にも別の巻で義助の敗因が明らかにされているのである(卷二十三「将を立つる兵法の事」)。

大将の拳状を帶せずと云へども、士卒直に訟ふる事あれば、勅裁を下され、わづかに山中祇候の身を以て、軍用を支へたる北国の所領を望む人あれば、事問はず聖断をなさる。これによつて、大将の威軽く、士卒心を恣はしむにして、義助、つひに百戦の利を失へり。これ全くかれが戦ひの罪にあらず。ただ上の御沙汰の違ふ所に出でたり。

四条隆資によると、後村上の勝手な介入が義助の威信を低下させ、軍勢の統率を乱し、敗戦に導いたというのである。しかも、

自身に敗戦の原因があることを後村上は知っていて、それゆえに「賞を厚く」したのだとさえ語っている。やはり、後村上には後ろめたいところがあつたのである。かつて後醍醐が新田義貞を見捨てようとしてばれたときに見せたのと同じ表情、「玉顔殊に麗しくして」義助に対面したのにも理由があつたのだ。

しかも、脇屋義助を南朝方の大将とする『太平記』の叙述は虚構であることが指摘されている。²¹こうまでして、『太平記』は戦場の武士までも直接自分の支配下に置こうとする後村上天皇像を創出しているのだ。後醍醐が亡くなった直後から、後村上は父親と同様の性格を持った人物として位置付けられているのである。

また、卷三十六「細川清氏以下南方勢京入りの事」も後村上天皇の性格を知る上で無視できない。そこでは、足利方から寝返ってきた細川清氏の進言に対する見解を、後村上が楠正儀に求めている。すると、正儀は慎重に振る舞った方がよいという意見を述べながらも、天皇の決断に従うと申し上げた。その結果、後村上は清氏の進言を支持し、「住み馴れし都の恋しさに、後の難儀をば顧みず」京都の足利軍の攻撃を命じたのである。ここは、「主上を始めまゐらせて、竹園椒房、諸司諸衛に至るまで」とあるから、後村上だけの問題とはいえない。だが、客観的状况よりも希望を優先させて判断を下した後村上天皇の姿が語られているのも事実である。その結末は、一度は京都を奪還したものの、体制を維持できずに、足利にまたすぐに奪い返されてしまうというものである。『太平記』は私欲を優先させたがゆえの後村上天皇の判断ミスを語っ

ているのである。

次に、持明院統の光厳天皇(院)・光明天皇(院)像について見てみよう。持明院統は足利將軍の立場を保障する存在であった。²²それは、卷十六「尊氏卿持明院殿の院宣を申し下し上洛の事」で、後伏見院が足利尊氏の要請に応じて院宣を与えたことに始まる。ただし、後伏見院というのは『太平記』の誤りである。卷十九「光厳院殿重祚の御事」では、光厳は院宣を出したからこそ尊氏によって再び天皇の位を与えられたと語られていて、それが正しい。そこでは、光厳が天皇だった際に三年も保たずに鎌倉幕府が亡んだ歴史を踏まえ、多くの人々が光厳の重祚²³に反対したのだが、自身の立場を保障する院宣を出してくれた恩に報いるべく、その反対意見を尊氏²⁴が押し切ったことが語られている。後に光厳院は、この時のことを回想し、「重祚の位に望みをもかけず、万機の政に意をも留めざりしかども、一方の戦士、われを強ちに本主とせしかば」(卷三十九「光厳院禪定法皇崩御の事」と重祚は不本意であったと述べている。だが、仮にこれが後々の気持ちであったとしても、尊氏から皇位を認められた際の本心ではなかったはずである。²⁴具体的に確認しておこう。

卷十六「持明院殿八幡東寺に御座の事」には、後醍醐が、光厳・光明ら持明院統の皇族達を比叡山に連行しようとしたことが語られている。そのとき、「すでに出御なりけるが、俄に御不豫の事あつて、暫く出御を押さへられけり」と、光厳が急に体調不良を訴えたために、持明院統の皇族達は比叡山に移らなかつた。その結果として、尊氏と出会うことができ豊仁親王(光明天皇)が皇位に

即くことができたのである。この時、語り手は、

後日に事の心を案ずるに、尊氏卿に院宣を故院なされし事なれば、御世務の事、思し召しはなたざりけるにや、その上、尊氏卿も内々申し入るる旨やありにけん。

と、光厳の野心を仄めかしている。光厳・光明達が尊氏の使者と出会った場面でも「聖運やしからしめけん」と批評を加えているから、持明院統に皇位回復の野心があつたというのが語り手の考えなのであり、連行される間際になって体調を崩したという叙述は、光厳の仮病を仄めかすものと理解してよからう。つまり、後醍醐と対照的に「受動的」人物像と評されている光厳院にも、意志的行動・野心が認められるわけである。

同様に、光厳・光明・崇光が自らの意思を貫いた場面を見てみよう。卷二十六「持明院殿御即位の事」には、崇光天皇の践祚の際の事件が語られている。²⁵一匹の犬が三歳くらいの子供の首を加えてきて、院の御所に置いて行ってしまったというのである。このように明らかに不吉な事件が起きたにもかかわらず、上皇は大嘗会を行うか否かを「法家の輩」に意見を求めた。すると、当然の如く皆「一年の触穢」と答えたという。だが、一人前大判事明清だけが「神道は王道によつて用ゐる所なりと云へり。しかれば、ただ宜しく叡慮に在るべし」と答えた。これを聞いた三人の態度を以下に引用しよう。

主上も上皇も、この明清が勘文御心に叶ひて、げにもと思し召されければ、今年大嘗会を行はるべしとて、武家へ院宣を成し下さる。

光嚴院達は、自分たちの希望に添った内容だったから明清の勘文を支持し、大嘗会を強行したのである。語り手は、「人の歎きのみあつて、聊かもこれぞ仁政なると思ふ事もなし」と持明院統―足利政権を批判した上で、大嘗会を行うことを批判する人々の意見を紹介している。つまり、持明院統の皇族達の私欲が招いた事態を批判しているわけだ。これ以降、観応の擾乱の模様が語り続けられていくことを踏まえば、多くの人々の意見を無視し、私心に基づいて下したこの持明院統の皇族の判断に乱の遠因が求められていることは明白である。

さらに言えば、持明院統のもう一人の天皇、後光嚴天皇の場合も同様である。卷四十「中殿御会の事」には、後光嚴天皇が中殿御会を強引に開催したという虚構が語られている。²⁶近臣が皆「中殿の宸宴は大儀なる上、毎度天下の凶事にて先規快からざる」旨を述べたにもかかわらず、後光嚴は中殿御会は「皆聖代の洪化」であり、現在は世が治まっているので開催するに適した時期であると強く主張し、希望どおりに開催したことが語られているのである。その時の様子は、次のように語り手の口から重ねて述べられている。

さても、中殿の御会と云ふ事は、わが朝不相応の宸宴たるによつて、毎度、天下に重事起こると、人皆申し慣はせる上、近臣悉く眉を嘸^{ひそ}めて諫言を上りたりしかども、つやつや御承引なかりけり。
(卷四十「將軍御参内の事」)

後光嚴の行動は、臣下の「諫言」を無視した独断によるものであったというのである。これに続き、天変地異・天龍寺炎上・鎌

倉公方足利基氏の死・南禅寺と三井寺の対立・宮中における延暦寺と南都による前代未聞の刃傷事件・將軍足利義詮の死と、連続する世上の混乱が語り続けられていく。そして、義詮の死に続き、細川頼之の管領就任と天下静謐が取って付けたかのように語られ、『太平記』は作品を閉じているのである。やはり、人々の意見を無視した後光嚴の勝手な判断が乱世を導いているのである。

以上からも判明するように、後村上・光嚴・光明・崇光・後光嚴のいずれの天皇の場合も、臣下の意見を聞き入れず、私心・私欲を差し挟み、独断で物事を決することがあった。つまり、これは『太平記』に登場するすべての天皇に共通した性格といえるのである。『太平記』は、臣下の意見を無視し、我をとおした天皇の独断が、乱世を継続させた一因であると語っているのだ。

では、このような天皇の性格は怨霊になった天皇にも認められるのだろうか。最後に、この点に触れて本論を閉じよう。

五、鎮くだけの怨霊後醍醐

後醍醐は怨霊となっても『太平記』の中で活動している。²⁷だが、具体的な活動が語られている場面は少なく、生前のような存在感があるわけではない。そのような中で、卷三十四「吉野御廟神霊の事」には怨霊後醍醐の姿が詳しく語られており、怨霊後醍醐像を考える上で無視できない。僉議の場面における怨霊後醍醐の判断の仕方に注目してみたい。

最初に物語の内容を簡単に説明しておこう。後醍醐は同じく怨

霊となった日野俊基・資朝を呼び、「君を悩まし、世を乱る逆臣どもをば、誰にか仰せ付けて罰すべき」と尋ねた。すると二人は、「この事は、すでに魔醯修羅王の前に(て)議定あつて、討手を定められ候ふ」と答えた。すかさず後醍醐が「さて、いかに定めたるぞ」と重ねて尋ねると、二人は怨霊となった楠正成・菊池武時・土居・得能・新田義興らに命じて計画を遂行することになったと述べた。これを聞き、後醍醐は「誠に御快げに打ち咲ませ給ひて」満足したというのである。

一読して、右の決定に後醍醐の意思が反映されていないことが見て取れよう。自身不在の魔醯修羅王の前で話し合われた内容に後醍醐は満足しているだけである。この他に怨霊後醍醐が人間界を乱すことを指示していたとする場面は一箇所しかない。卷二十四「正成天狗と為り剣を乞ふ事」の「先帝の勅定にて、正成参り向かつて候ぞ」という怨霊正成の発言中だけである。つまり、怨霊後醍醐の姿はほとんど描かれていないのである。

また、卷三十四と同様に怨霊の僉議の様を語っている章段に、卷二十六「大塔宮の亡霊胎内に宿る事」がある。ここでは、怨霊大塔宮護良親王が怨霊化した峯僧正春雅・智教上人・忠円僧正らと、観応の擾乱を引き起こす計画を話し合う様が語られている。その話し合いの進め方はやはり卷三十四のそれと同じである。すなわち、峯僧正春雅が「さて、この世の中を、いかがしてまた騒動せさせ候ふべき」と聞いたところ、忠円僧正が具体的な計画を語る。そして、それを聞いた大塔宮護良親王以下の怨霊が「いしくも計らひ申されたる事かな」と賛同し、計画が実行されると

いう展開である。

故事・説話を除くと、怨霊の僉議場面はこの二箇所だけである。そこでは、怨霊たちの計画は、後醍醐や大塔宮の私心が差し挟まれることなく決定され、遂行されている。つまり、後醍醐天皇は、怨霊となつてからは、独りで決めることはなくなり、臣下の意見を素直に聞ける人物となつているのだ。生前と異なり、個を抑えて臣下と協調した施策だったからこそ、怨霊後醍醐は計画どおりに人間世界を乱せたのだろう。

かくして、怨霊後醍醐の計画はうまく進むも、卷三十八「兵庫の在家を焼く事」に語られる貞治改元により力を失う。そのせいか一時的に世に静謐がもたらされたかのように思われた²⁹が、その後展開したのは、前述した後光厳の独断に起因する乱世であつた。天皇の独断が乱世の演出に役買つてしまつていたのである。

このように続いてきた『太平記』の乱世は、細川頼之の突然の登場をもつて終わる。まるで、「序」の理念に沿った枠組みを強引に提示し、その中に乱れ続ける世界を包み込んでいるかのような終わり方である。その「中夏無為の代」を迎えた最後の場面に天皇の姿は認められない。私心を優先させる天皇は、「中夏無為」に貢献していないということなのだろう。これが「明君」不在の物語『太平記』の語り収め方なのである。

【注】

1 筆者が調査した伝本を列举する。西源院本・織田本・神宮徴

古館本・玄玖本・松井本・神田本・南都本・相承院本・筑波大学本・築田本・宝徳本・正木本・今川家本・書陵部本・吉川家本・毛利家本・米沢本・前田家本・梵舜本・天理大学本・神宮文庫本・学習院大学本・慶長七年古活字版・慶長八年古活字版・天正本・教運本・野尻本・京大本・豪精本・神戸大学附属人文科学図書館本・中京大学本。神田本・今川家本・神戸大学附属図書館本は当該巻を欠く。なお、野尻本は「少^{シモ}……不^{タカ}相違^リ」、学習院大学本は「少^モ……不^{タカ}相違^リ」と、頼之が完全に義時・泰時に似ているという文章になつてゐる。これは、梵舜本系本文(梵舜本・天理大学本・神宮文庫本・宝徳本)の「少^{シモ}……相似^リ」(梵舜本)という乱れた本文を整合化させようとした結果だろう。

2 細川頼之像の評価をめぐる研究史と、本論とは異なつた観点からの筆者の考察は、和田「細川頼之の管領就任記事の位置付け」(『太平記』生成と表現世界』新典社、二〇一五年)〔以下、拙著〕。初出は二〇一一年一月)でも論じているので参照されたい。

3 和田「第一部の構造」(拙著。初出は二〇一五年一月)参照。

4 この章段は神宮徴古館本等にはない後補された章段と考えられるが、大森北義氏により「太平記の太平記らしい性格を特徴的に表現している章段」と評価されている。大森氏「太平記にみる観応の擾乱(二)「雲景未来記事」を中心として」(鹿兒島短期大学研究紀要』一〇、一九七二年一月)・小秋元段氏「『太平記』観応擾乱記事の一側面——「雲景未来記事」を中心に

——」(『太平記・梅松論の研究』汲古書院、二〇〇五年。初出は一九九一年二月)等参照。

5 『太平記』の中で批判されていない希有な二人である。増田欣氏「『太平記』における漢籍の影響」(『太平記』の比較文学的研究』角川書店、一九七六年)参照。

6 もちろん公卿僉議の結果を踏まえて天皇が判断を下す場合もある。北村昌幸氏「『太平記』における諸卿僉議——南朝の意思決定をめぐる諸問題」(『太平記』国際研究集会編『『太平記』をとらえる第二巻』笠間書院、二〇一五年一〇月)参照。

7 長坂成行氏「帝王後醍醐の物語——『太平記』私論——」(『日本文学』三一、一九八二年一月)参照。

8 中西達治氏「太平記における光厳院」(『太平記の論』おうふう、一九九七年一〇月。初出は一九九〇年一月)参照。

9 本論と関わる代表的な論考のみ紹介しておく。北爪幸夫氏「後醍醐の死に対する幕府および北朝の対応」(『太平記研究』三、一九七三年六月)・長坂成行氏「『太平記』欠巻前後——後醍醐物語の変貌」(奈良大学文学部国文学研究室編『^{鈴木弘道教授退任記念}国文学論集』和泉書院、一九八五年三月)・今井正之助氏「後醍醐怨霊譚の機構——『太平記』卷二十三「上皇祈精直義病悩之事」を中心に——」(『国語国文学報』五〇、一九九二年三月)・濱崎志津子氏

「『太平記』における後醍醐像の屈折点」(新潟大学国語国文学会誌』三五号、一九九三年五月)・中西達治氏「後醍醐天皇について」(『太平記の論』。初出は一九九六年三月)・鈴木登美恵氏「後醍醐天皇崩御と太平記の政道批判」(軍記文学研究叢書9『太平記

- の世界』汲古書院、二〇〇〇年九月）・森茂暁氏『後醍醐天皇
南北朝動乱を彩った霸王』（中公新書、二〇〇〇年）・大坪亮介氏
『『太平記』における後醍醐天皇と北野天神——「北野通夜物語」
の構想——』（『国語国文』七七一・二、二〇〇八年二月）。
- 10 北村昌幸氏「怨霊後醍醐の役割」（『太平記世界の形象』塙書
房、二〇一〇年）参照。
- 11 注6論文参照。
- 12 注9論文参照。
- 13 「仁政」の対極に位置する語で、その他には、卷三十二「芝宮
御位の事」に「遊宴、奇物」を好まない承胤親王を賞賛する場
面に用いられているだけである。
- 14 本論に関わる正成像を取り上げた代表的な論考を紹介してお
く。増田欣氏「楠正成」（『国文学』二二・四、一九六七年三月）・
中西達治氏「楠木正成について」（『太平記論序説』桜楓社、一九
八五年。初出は一九六八年五月）・今井正之助氏「正成一人未タ
生テ有ト聞食候ハ——『太平記』における楠正成の位置——」
（『国語と教育』三、一九七八年十一月）・加美宏氏「南北朝期に
おける楠木正成像」（『太平記享受史論考』桜楓社、一九八五年。
初出は一九七八年十一月）・大森北義氏「楠木正成の死」（『太平
記』の構想と方法 明治書院、一九八八年）・佐倉由泰氏「『太
平記』と「気」（佐伯真一氏編『中世の軍記物語と歴史叙述』竹
林舎、二〇一一年四月）。その他に注5論文も参照されたい。
- 15 注1の諸本参照。ただし、神田本・南都本・京大本は卷三を
欠く。
- 16 底本の西源院本は公卿僉議の結果を後醍醐が伝えたという文
章になっている。だが、正成の進言を受け入れるべきだとい
う諸卿僉議の結果が出たにもかかわらず、坊門清忠だけが天皇の
面子・威光を損ねるからといって、正成の意見を退けるべきだ
と主張し、その清忠の意見を後醍醐が取り入れたという神田本
等の本文が古い形だったと考えられる（小秋元段氏「神田本『太
平記』本文考——卷十六を中心に」（『太平記』国際研究集会編
『『太平記』をとらえる第二巻』笠間書院、二〇一五年一〇月）。
筆者も、正成が「勅定」と認識していることから、後醍醐の
意思を反映した判断だったというのが本来の姿と考える。
- 17 注6論文参照。
- 18 忠鉢仁氏「降人を以て大将とはせず——太平記作者の視点
——」（長谷川端氏編『太平記とその周辺』新典社、一九九四年
四月）参照。
- 19 鈴木登美恵氏「太平記欠巻考」（『国文』一一、一九五九年七
月）参照。
- 20 詳細は、和田「武家の棟梁抗争譚創出の理由——新田義貞像
の役割——」（拙著。初出は二〇〇四年三月）参照。
- 21 鈴木登美恵氏「その後の義貞・義助」（鈴木登美恵氏・長谷川
端氏『鑑賞日本の古典13太平記』尚学図書、一九八〇年六月）参
照。
- 22 和田「天皇と将軍／将軍と武将」（拙著。二〇〇三年九月）参
照。
- 23 光厳重祚は虚構と考えられる。詳細は注8論文参照。

24 社本武氏「太平記に描かれた天皇たち」(『古典』一二、一九六一年一月)参照。

25 濱崎志津子氏「天狗と動乱——『太平記』の批判の方法——」(『新潟大学国語国文学会誌』三四、一九九一年三月)は、この記事が虚構である可能性を指摘されている。

26 川添昭二氏『今川了俊』(吉川弘文館、一九九四年新装版第二刷)六四頁・北村昌幸氏「動乱期の例証と歴史叙述」(『太平記世界の形象』参照)。

27 中西達治氏「怨霊の系譜」(『太平記論序説』。初出は一九七五年二月)・注7論文・大森北義氏「先帝後醍醐の崩御と『怨霊』の跳躍——第三部の「発端部」について——」(『太平記』の構想と方法)・注9今井正之助氏および大坪亮介氏の論文・注10論文等参照。

28 注10論文参照。

29 詳細は、和田「細川頼之の管領就任記事の位置付け」(拙著。初出は二〇一一年一月)参照。

【付記】

本論は、JSPS科研費(若手研究B)「室町時代における『太平記』の異本生成過程の研究」(JP26770088)の成果の一部であり、二〇一五年一月一日に開催された早稲田大学国文学会秋季大会での口頭発表を元になっている。席上、御教示いただいた方々に記して感謝申し上げる。

引用本文は、西源院本を底本とした兵藤裕己氏校注『太平記』

(岩波文庫)を用い、基本的にルビは省略した。その他の諸本の本文は原本・紙焼き写真・影印本によった。

— わだ たくま・文学部准教授 —